

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版



小説 栗栖ティナ

挿絵 緑木邑

第一章	星光の魔法少女	006
第二章	淫蟲の呪縛	033
第三章	禁断の秘術「聖邪逆転」	097
第四章	魔乳狂宴	143
第五章	裏切りの邪根破瓜	174
終章	闇の魔法少女	251

登場人物紹介

Characters



みやびかりん
雅華鈴

強い正義感を持つ少女。異世界に伝わる伝説の宝具の使い手に選ばれ、魔法少女として魔物達と闘うことになる。

おうみなぎさ
近江渚

聖パリス学園の生徒会長を務める容姿端麗な才女。華鈴のことを溺愛している。

ギスカール

魔法の国ミスルを滅ぼし、宝具を追って華鈴達の世界へと侵攻してきた魔王。

第三章 禁断の秘術「聖邪逆転」

「あう……うう……」

——死闘から一夜。暗い地下牢の中。宙に浮かぶ、骨でできた十字架の台に足を広げた「大」の字姿で、魔法少女の邪液に汚れた身体が磔にされていた。

(身体……動かない……魔力も戻らなくて……)

魔力を封じる強烈な結界が張られているこの牢に閉じ込められ、逃げることもできず、ただ呻くしかなかった。

塗り込められたダークスライムの汚液のせいで、エメラルドグリーンとホワイトの二色だけだったワンピースドレスは悪臭を放つ茶色や紫の染みだらけになっている。元の純潔さの欠片も感じない無残な有様だ。

剥き出しの太ももにこびりついた液痕はすっかり乾き、饘^すえた腐臭が鼻腔を乱雑にくすぐって嘔吐感呼び起こした。

(渚ちゃんは大丈夫なのかな。ボクが油断したせいで……)

絶望的な状況の中でも、華鈴はただ、渚の身を案じ続けていた。

(もしかしたら、もう殺されちゃって……ううんっ、そんなことない！ まだ絶対に大丈夫……だから諦めちゃダメだ！ ボクが絶対に助けるんだ!!)

親友を無事救い出す。その目的だけが、敗北感と絶望に打ちひしがれている魔法少女を支え、折れない勇気を与え続けていた。

「くくっ……頑張るな、魔法少女」

「っ！ ギスカール!!」

目の前に広がる闇から聞こえてきた低い声に、小さな唇が怒声を絞り出す。

闇に溶ける漆黒の巨体。そこにいつの間にか現れていたのは、憎き深淵王の姿だった。

「離せ……離せっ！ 渚ちゃんをどうしたっ！」

「ほう、まだ菌向かう元気が残っているか。くくっ、他人の心配をしているような状況ではあるまい？」

「うるさい！ 渚ちゃんを傷つけたら……絶対に承知しないぞ！」

まるで力の入らない身体を奮い立たせ、気丈に叫ぶ。

その気高き勇氣に、汚辱され尽くしたワンピースドレスが、わずかに力を取り戻したように、ぼんやりと淡い光を放ち始めた。

「安心しろ、まだ殺してはいないさ。くくっ……まだ使い道もありそうなのでな」

「よかった……まだ生きてる……」

楽観できる状況ではないけど、それでも最悪の可能性が否定されたことで、華鈴は安堵と希望を取り戻した。

ドレスが放つ光も次第に強まり、徐々に染み込んだ汚液を洗い流し、元の汚れなき白と

淡い緑色を取り戻しつつあった。

「ふむ、わずか一晚でダークスライムの封魔力を振り払いかけているのか。やはり、その余りある魔力を絞り取ることから始めねばな」

「絞り取るって、一体何を考えてるの、ギスカール!？」

華鈴の膨らんだ胸に、言い知れぬ大きな不安がよぎった次の瞬間。

ジュルウ……ジュルルルウ……。

「ひっ!! 何……この音……」

黒衣の巨体の背後から聞こえてくる摩擦音。目を凝らして覗き込んだ闇の中に現れたものに、つぶらな瞳が凍りついた。

それは巨大な毛糸玉とでもいうのだろうか。細いものから太いものまで、様々な紐がもつれあつた球体。タコやイカのような無数のイボが付いた肌。白く粘度の強い液を滝のように滴らせる、青紫色をした蛇触手だった。

亀のような口をパクパクと開くそれは、遠目に見るとまるで男根にも似た形。目線を逸らしたくなるおぞましさ。無数の毒触手が包み込む中央には赤く血走った大きな目玉が開き、ギロリと宙に浮かぶ華鈴の姿を睨みつけていた。

「さあ……あれが獲物だ。存分に味わい尽くせ!」

シユル……シユルルウ……。

野太い声で指示が飛んだ瞬間。蛇手の群れが一斉に浮かび上がり、野獣のような勢いで、

囚われの魔法少女の肢体へと伸びていく。

「なっ、何……いやっ……いやあああっ！」

不気味な音と共に近づく蛇触手の群れに、必死に身体をばたつかせて逃げようとする。

だが、邪悪な魔力で台座に張りつけられた手足はまるで動かさず、どうにもならない。

「くっ……負けないもん!! 光よっ！」

身体に込み上げる嫌悪の震えを抑えながら、必死に詠唱を始める。それと同時に、ワンピースドレスのわずかな輝きが光の弾丸となり、迫る毒蛇触手へと降り注いだ。

ズシュズシュッ!

いくつかの蛇頭を撃ち抜いた光弾だが、さすがに無数迫る蛇手のすべてを撃ち抜くことは不可能。逆にいくつかの光弾は、大口を開けた蛇頭に飲み込まれていく。

ゴボツ……ゴキユウ……ゴキユッ!

不気味な音と共に蛇胴竿が膨らんで光弾が吸収されていくのを、華鈴は呆然と見つめるしかなかった。

「そんな! 魔法が……飲まれてる?」

余りに予想外な事態。驚愕で、青紫色に染まった唇が戦慄く。

迫りくる触手達は、やられた仲間の敵討ちと言わんばかりの激しい勢いで蠢き、華鈴の身体に絡みついていった。

「ひやあっ! やだあっ……あああっ!」

最初にたどり着いた四本の極太手が、両手脚をしっかりと縛り上げる。無数のイボがびったりとブーツに、手袋に、キュウキュウと音を立てて強く吸いついて離れない。

同時に先端から溢れ出した白濁液が、ブーツと手袋にダラダラと垂れ落ちていく。

「な、何……動けない……あう……うう……」

まるでシリコン液のように、白液はプルプルと弾力を持ちながらしっかりと固まり、少女の白魚のように透き通る手足を完全に捕縛してしまった。

液塊から立ち上る強烈な悪臭。体育の授業を終えた男子達に近づいたときのような、汗と雄臭さを何十倍も濃縮した匂い。強い嘔吐感に、魔法少女の眉が苦しげに歪んだ。

「くくっ……雌を躑けるために作った、特別の合成獣よ。男達の身体から切り取った男根を集めて作った淫獣の味はどうだ？」

「ひっ、酷いっ!! なんてことを……」

明かされた想像を絶する魔物の正体。気が遠くなるような怒りが身体を貫き、声を出すことも困難なほどだった。

手足に絡みつく男性器にも似た形の蛇手。似ているのではなく、これらすべてが元は本物の肉棒だったというのか。この濃縮された雄の悪臭も、それならば納得がいく。

そこまで考えたとき、華鈴の疲労で霞む脳裏に、恐ろしい想像が浮かんだ。

「まさか! もしかして、ミスルの……?」

「察しがいいな。その通り、ミスルの偉大な魔道士様達のなれの果てよ」

「そんな……そんなことって……」

無残に死んでいったミスルの人達の身体すらも悪用する、深淵王の余りに非道なやり方。華鈴の心で、正義の怒りが勢いよく燃え上がる。主の激情に力を取り戻したのか、汚液塗れだった胸の星飾りが静かに輝き始めた。

だが、そんな気迫にも、目前の黒衣はまるでひるむことはなかった。

「残り少ない貴重な魔力をわざわざ馳走してくれたんだ。礼を返さねばなるまい」

ギスカールの勝ち誇った高笑いと同時に、手足に絡みつく触手の中の一本が動きだす。

並の男根程度の太さで、それ故に一際生々しい蛇頭がスルッと伸び、悔しそうに呻く美少女の小さな唇へ押し当たる。わずかに開いていた隙間を、弾丸のような勢いで突き進む亀頭が貫き、生臭い侵入者が口内を埋め尽くした。

「おぐうっ!! んぐむううっ、臭いよお……ほむうっ!」

薄汚れたトイレの中で深呼吸をしたような強烈な汚臭。ヨーグルトのようにドロリと流れる濁液の感触が、口いっぱい広がっていく。

激しく咳込み、侵入者を吐き出そうと試みる。だが、不気味にぬめる肌面に付いた無数のイボが、唇や口内粘膜にしっかりと吸着してしまっていてどうにもならない。

(熱いっ! なんてこんなに……う)

硬く熱い感触が、口内粘膜を容赦なく撫でる。ポコッと出っ張った冠状部分が歯を押し返し、圧迫感が口いっぱい広がっていく。苦しさに自然と溢れ出す唾液が竿に付着した

白濁ゼリーを溶かし、その雄腐臭をますます強烈にした。

目も眩むような強烈な汚辱感。と、呼吸もできなくなって苦しげに細めていた眼下、埋め込まれた触手の竿がポッコッポッコツと音を立てて膨らみ、何かを送り出し始めていた。

ドブウウウウッ！ ビュルルルルッ！

「じゅるうぶうっ!! きたなあっ……あぐむう！ じゅるう……ずじゅああ！」

次の瞬間、口の中で爆発したような音と共に、溶岩のようにドロリとした、塊のような汚液が流し込まれた。粉葉のような強い苦味が、いっぱい広がっていく。

(あつう……何、いやあ……気持ち悪いッ!! うう……ああつ……!!)

粘膜の一番奥、小さな木の実のようにぶら下がっている咽頭を押し流すような荒々しい勢いで、灼熱のマグマ液が食道を滑り落ちていく。

ドシンッと音を立て、お腹に濁流が落ちたのを感じた次の瞬間。魔法少女は脳天を貫いた熱波のような刺激に目を見開いた。

「あぐうっ……ああつ……ひゃっ……アアアッ!!」

炎を纏った蟲が胃の中で暴れているような膨張感。強力な魔力がそこで放たれるのを感じたと同時に身体中の感覚が鋭くなる。

(身体……これって魔力？ お腹の中で……魔力が暴れてるう！)

臓腑に生まれた蠢きが、鼓動に合わせて急速に全身を火照らせる。

手足に吸いつき絡むイボと触手肌の感触、汚唾液や白濁液の放つ雄腐臭が、今まで以上

にくつきりと浮かび上がって感じるようになり、強烈に心を揺さぶり苦しめ始めた。

それは先日、敗北の原因となった媚香を嗅がされたときとよく似た感覚だった。

(もしかして、今、飲まされたのがまた……)

嫌な予感が冷や汗と共に背筋を流れたとき、怨敵の高らかな笑いがそれを肯定した。

「どうかな、特製汁の味は？ こいつは、吸収した魔力を体内で催淫の魔法に組み替えることができるのさ」

「あぐう……はあ……ムフウ……催淫の魔法ってええ……くううっ!？」

「ふふっ、先日の邪淫香よりも数倍効き目の強い汁だ。いつまで正気を保てるのか見物だなあ……カカカッ!!」

勝ち誇るギスカールが告げる通り、華鈴の肌は白の絵の具にわずかに赤を落としたようにほんのりとピンクに染まり、甘い雌汗を浮かべ始めていた。

(あっ、熱い……何だか……頭がぼーっと……)

苦しさも気持ち悪さも、すべてが霧に包み込まれるようにぼやけていく。ジンジンと、胸の奥に生まれる甘感だけが全身を縄のように呪縛していく。

まるで全力疾走した直後のように、荒く速くなっていく呼吸。吐息に合わせ、激しく上下に動く双乳が、ワンピースドレスに擦れ、微妙な疼痛に震える。

「胸えっ、いうっ……っう……っ！ ひっくあっ!」

汚液を流し込まれたお腹の中で、どんどん熱が高まる。自然と浮かび上がる汗の雫がド

レスに染み込み、水玉模様の跡を作った。

(何これ、どうしてこんな急に！ 感じてなんて……感じてなんてえ!!)

不快な触手達の密着感。それが身体全体に媚感を生み出している事実が、少女の胸を揺さぶり続ける。

ジュルウ……シユルルッ……。

抵抗する力を失った美少女の身体へ、残りの肉棒手達も一斉に群がっていった。

「うごお……じゆるうう……ふあむうんんッ!!」

首のチョーカーの上に細い蛇手が絡まる。肌面のイボが蠢きながら汗の浮かんだ白肌にぴったりと吸いつく。うなじを伝って垂れ流れる雄臭液。半透明のテープに染みを残しながら、ワンピースドレスと肌の間を流れ落ちていく。

まるで羽根箒でくすぐられているようなこそばゆい感覚。華鈴は堪えきれない刺激に、身体を艶かしくくねらせることしかできなかった。

「むうはああっ！ はぐうう……うっ……むうっ!!」

竿触手で埋められた口。吸盤がべったりと張りついた唇から媚息が荒く漏れ始める。

欲情感をそそるような甘ったるい息。それに促されたかのように、更に二本の太い触手が揃って胸元へと伸びていく。

魔法少女となったことで、本来よりもだいぶ成長している二つの豊かな乳丘。まず大きく開いた胸元を隠す星飾りに蛇頭達は揃って吸いついた。

チユウウウツッ！ チュルルルツチユパアアッ！

鳴り響く汚液音。割れた先端と吸盤イボがしつかりと飾りを捕縛し、そのまま右横へとずらしていく。

あらわになつた谷間。白皿の上にはびったりとくつつき並んだババロアのように柔らかく瑞々しいその隙間へ、触手の頭が勢いよく侵入していった。

「ふぁうう……ぬちゅぬちゅつて……おっぱい擦れえ!」

玉のような汗の雫が浮かぶ乳脂肪の間を、粘液塗れの触手が滑り落ちていく。ズルズルと柔らかい肉玉を撫でる微妙な接触感。震えた乳肉の先端、小さなキャンディのようなニップルが、揺れに合わせて服に擦れる。

(ふぁうつ……擦れてるう!? 乳首擦れて……痛いっ……気持ち……いいっ?)

敏感すぎる乳果実への刺激。まるでそこに電流を直接流されたような、苦痛と表裏一体の鮮烈な快感を生み出していた。

(ダメ!! こんなのに流されちゃったらダメだよおっ……ボク……ボクは魔法少女……正義の魔法少女だもん! 耐えなきや、頑張つて耐えなきやあ……!!)

華鈴の悲痛な決意をあざ笑うかのうように、谷間に埋もれた蛇手は、ワンピースドレスをボコボコと持ち上げながらずり落ちていく。

おぞましい魔触手が、甘露のような汗を浮かべた熱肌を進んでいく摩擦感。イボイボの吸盤があばらの辺りに引っかかる衝撃で、背中にぶるると鳥肌が立った。

ズリユウ……ジブウウ……ジュルウウ……。

汗と粘液を混ぜあわせる水音と共に、毒竿が上下に激しくピストンを始める。

「おぐう……おおつ……むあう……ふあう……アアアッ」

吸着力のあるイボが、胸肉にくつつき、その柔らかい肉面を牽引する。

クチュ……チュポオ。

強く擦れると、イボはすぐに大きな音を立てて勢いよく外れてしまう。乳肉を針で突かれていたような鋭い痛みが断続的に走った。

吸いつかれた部分は赤い痣となり、白一色だった乳肌のあちらこちらを無残に汚す。

（痛い……痛いよおっ！　こ、こんな……お、おっぱいがあ、引っ張られてるうっ！　気持ち悪い……ううう）

思わず涙すら浮かぶ苦痛なのに、それが同時に脳裏に暗い火を灯す快感にも思える。

胃を膨らませる魔粘液の催淫効果のせいだろう。わかっていても、今の華鈴にはどうすることもできなかった。

「ちゅぶう……ちゅうんんっ……んぐぐぐう……ごほっごほお……ッ」

小さく呻きながら、それでも諦めずに抵抗しようと願い続ける。

身を包む宝具は主の意志に答えようと、浴びせかけられるスライム状の白濁の下で健気に光り、魔力弾を断続的に放っていく。

だが、そんな必死の抵抗も無数ある蛇触手に飲み込まれ、皮肉にも口に押し込まれた毒

触手から注がれ続ける催淫の魔術の糧となるだけだった。

(苦しい……頭……ぼーっとして……)

口から絶え間なく注がれる白濁粘液が、まるで汚水の中で溺れているような息苦しさを感じさせる。胸を痺れさせる官能が、背筋から脳天まで電流のように流れていく。諦めることを知らない魔法少女の気力が、着実に削り取られていった。

「はあ……ああ……にゆるってしてえ……あれ……ええっ!？」

収まらない荒い息。その中に混ざる、異質な水音。

太ももを流れる熱感触が、冷や水を浴びせかけられたような衝撃を生む。

(何……お漏らし……? 違う……ぬ、濡れてるの……嘘っ!)

広げられた足の間。青白のストライプショーツが、まるで粗相をしてしまったかのようにぐっしよりと濡れている。透けて見える奥、薄桃色の淫唇から止め処なく垂れ流れる愛蜜。ショーツの布地から染み出し、太ももを流れるのがはつきりと感じられた。

(また感じちゃってる……魔物に汚されて……)

昨日、おぞましいダークスライムによって陵辱を受け、達してしまった屈辱。そして今もまた、禍々しい触手に嬲られて感じてしまっている。

(ボク……魔物で感じるエッチな子なの……? ううう、そんなの違うもんっ!!)

快感を必死に否定し、首を横に振る。だが、激しく吸われる乳肉に走る甘い痺れ、唇を擦るイボだらけの竿の摩擦、そして手足を包むねっとり熱い白濁ゼリーの感触。いくら否



定しても、全身を襲う触手責めの陵辱感は、身体の芯をますます熱く火照らせていく。

「ククッ……溢れ出してきたか。いい塩梅だ」

太もも伝いに石床に垂れ落ちる蜜液。闇の中にわずかな光の軌跡を残して落ちていく雫を見守り、ギスカールが背の大鎌を手を取った。

（何……一体、何をやる気なの!）

また新しい魔物を召喚するつもりなのか？ それとも、違った恐ろしい魔法を使うつもりなのか？ 不安を高まらせる華鈴の前で、漆黒の大鎌が勢いよく振り下ろされた。

放たれる黒い霧。華鈴の丁度真下で、まるで竜巻のように渦を巻き始めた。吹き上がる風圧で、裾の飾りごとスカートが捲り上げられ、蜜液の滴る熱太ももが丸見えになる。

「ひあつ！ 冷たつ！ 何……これえ！」

小さな悲鳴と共に見下ろす竜巻が、次第に固まり、形を変えていく。

竜巻が完全に消えると同時にそこに出来上がったのは、全体が漆黒で塗り潰された巨大な瓶。魔法少女の身体をそのまま飲み込んでしまふようなほどの大口を開けたそこへ、染み出す蜜液が垂れ落ちていく。

ポタ……ピチャ……ポタア……。

まるで雨漏りの天井下に置かれたバケツのように。小さな水音を伴って、蜜液が少しずつ溜まっていった。

（いや……そんな、私のエッチなお汁の音聞こえてくる……ううっ！）

恥ずかしい愛液が、一滴ずつ溜められている異常なシチュエーション。下から響く恥辱の水音が、目を背けてもその現実を教えてくれる。

(こんなの……嫌あつ！ ボクのお汁溜められてる……いっばい……嘘だあつ！)

胸が潰れそうな恥辱。眼下の悪夢を一刻も早く砕こうと、必死に意識を集中して魔力を高めていく。汚液塗れの中、小さく輝き始める正義のワンピースドレス。だが、華鈴の必死の願いも虚しく、その光の勢いが徐々に失われていった。

(えっ……なんで!? どうして……力が出ない……)

祈り続ける華鈴だったが、太ももや触手に絡みつかれたブーツを伝って垂れる蜜液がポタポタと音を立てるたびに、気力をこっそりと削り取られるような脱力感に襲われた。

(どうして……魔力が……なくなっ……?)

「くっ……力が抜けていくのが不思議かね、魔法少女」

戸惑う華鈴の真下。いつの間にかそこまで歩み寄っていた黒衣の巨体が、垂れ落ちる蜂蜜をその太い指先で受け止めて、ペロリと舐めた。

「予想通り、見事な味わいだ。さすがエンジェルスキンが与える魔力だけのことはあるな

あ……極上だぞ」

(そんな……あんなお汁を舐めるなんて……汚いよお！)

自分の淫肉から染み出した甘酸っぱい液が舐められている。しかも、一番憎い男に。

首を垂らし見下ろす屈辱の光景。自分の身体の中が、そのおぞましい舌で舐め尽くされ

ているような錯覚を感じ、ゾワゾワと身の毛もよだつ寒気を覚えた。

「所詮、宝具が苦し紛れに選んだ素人。この程度の魔力の基礎知識も知らんとはなあ」
(何のこと……い、一体……)

華鈴は、抑えきれない苦痛の涙と共に疑問を浮かべた瞳でギスカールを睨む。

「人の身体から、もつとも効率よく魔力を搾り取る方法とは何だと思う？ その答えがこれだよ、愚かな魔法少女。快樂で精神を揺さぶることで、身体を流れる魔力は体液に溶けて放出されるのさ！」

(魔力が溶ける……どうということなの？)

すぐには飲み込めなかった華鈴だが、ともかく、身体に感じる強烈な脱力感は現実のもの。快感で火照っていた頬を青く染め、小刻みに震え始めた。

(耐えないと！ これ以上魔力を失っちゃったら……ボク、もう魔法が使えなくなる！)
心の中で叫んでみたところで、一度火が点いた身体の疼きが収まるはずもない。

ジュルウ……チュウウ……チュプウ……。

太ももから流れ落ちる蜜液に吸い寄せられるように、新しい触手がワラワラと群をなして伸びてくる。濡れたショーツが、イボ吸盤に引つ張られてあっさり横にずらされる。

魔力愛液の洪水となっている、無残に押し広げられた太ももの再奥部の蜜園。あらわになったもつとも大事な部分へ、触手頭が殺到した。

(いっ、いや……そこ……そこ責められたら！)

「中には入るなよ。最後の純潔を守る魔力だけは、まだまだ健在だろうからな」

ギスカールの忠告通り、触手達は蜜を溢れさせる雌淫穴まで侵入することはなく、じつとりと濡れて輝く淫唇肉に群がる。蜜を滴らせる左右の肉ヒダに、ずらりと列になって吸いついた。グイグイと力強く吸い引つ張られると、閉じられていた淫裂が口を開け、隠されていた膣穴までもが丸見えになってしまう。

（す、吸わないでえっ！ くう……あああっ！）

肉ヒダに断続的に生まれる疼きが、腰全体を痺れさせていく。

「んぐう……ちゅぷうう……じゆるうううぐうう」

口を埋める亀頭口からは、止まることなく白汚液に混じった催淫魔力が注がれ続け、強いアルコールのように身体の中を焼いていく。胃から子宮に強烈な刺激が染み込むと、子宮口が痙攣し膣道が止め処なく蜜を溢れさせているのが自分でもはっきりわかった。

ポタ……ポタ……ピチャア……。

広げられた蜜裂から滴る魔力の箆った雌汁は、小雨から夏のにわか雨のような勢いへと変わり、下に置かれた瓶へ大量に垂れ落ち続けていた。

（らあ……らめえ……もうう……あそこ、キュンって熱くなって……おかしいよお！）

切なげに眉をひそめて悶える少女を見上げ、黒衣の巨体は満足げに笑い始めた。

「さてさて……何せエンジェルスキンが生み出す魔力だ。すべて搾り取るまでには、時間がかかるだろう。その瓶がお前の蜜で溢れ返るまで、存分に楽しむがいい」

(そ、そんな……こんな大きな瓶いっぱいになんて……)

昔風の五右衛門風呂を一回り大きくしたような巨大な瓶。これいっぱいになるほどの愛液を滴らせるなど一日、二日のできるわけがない。

「案ずるな。お前の口に流し込まれている汁には、最低限、人を生き延びさせる程度の治療魔力も含まれている。何も心配せずに、安心して快楽を貪り続けるがいい。くくっ……では、また後日会おう、魔法少女よ」

(嘘！ いや……くっ……逃げないと……逃げないとおっ！)

グチュウ……ジュチュ……ニユチュウウウ。

必死の思いを踏みにじるように、淫唇に吸いつく亀口達の強烈な吸引が続く。

「ひやあつ！ 強く……強く吸っちゃダメなおっ！ あぐう……」

恥肉が引つ張られるたびに、じんじんと快感の痺れが駆け上る。膣壁にまで響く衝撃が、少女の悲痛な意志を踏みにじり、更なる蜜液を奥から溢れ出させる。

「ぼたぼたあつ！ あ、熱いのでちやううつ！ 出ちゃ……ダメなおっ！ 魔力でたらあつ！ ぬめぬめえつ……ひやあああつ!!」

ポタポタ……。ピチャアッ……。

瓶に落ちる水音が、咽喉を突き上げる嬌声と混ざる。少女の高まりを悟ったように、新しい触手の一本が割れ目へと伸びてくる。吸いついた場所は、淫裂の端。包皮から白に近い桃色の頭を覗かせていたクリトリス。

「あいひいつ!! ちひいれえ……ああつ、大事なお肉う……千切れちゃああつ!」

一番敏感な雌核を強く吸われた瞬間、意識が吹き飛ばされそうな官能が生まれた。腰が爆発したような絶頂感が、身体全体を痙攣させる。

プシューウウウウ! ピチャアアアッ!!

痙攣する膣壁から絶頂のフレッシュジュースが溢れ出し、滝のように瓶へ流れ落ちる。

「じゅるるうつてえ……イクううつ! お汁うつ、びちやちやつてえー! ひああつ!」

快感に抑えきれない嬌声を叫んだ直後、一際強烈な脱力感が襲いかかった。

(……諦めちゃ……ダメ。渚ちゃんを……せめて渚ちゃんだけでも助けないとお……)

まだ生きていると知らされた親友を救い出す。そんな思いもやがて快楽へ塗り潰されていく。愛液が滴り溜まる音をBGMに、陵辱触手達の責め苦に耐え続けた――。

――黒衣の巨体が地下牢へ再び姿を現したのは、それから一週間も後のことだった。

「ふむ、これはまた……随分と姿が変わったな。可愛らしい姿になったものだ」

磔にされた華鈴を見上げ、ギスカールが黒衣の下で嘲笑を浮かべる。

「はあ……あ……」

無限に続くかと思えた触手地獄。幾度となく襲いかかる絶頂と苦痛の波に蜜液を溢れさせていた華鈴の身体からは、ほとんどの魔力が失われていた。魔法少女としての凜々しい姿を保つことも困難なほどに。

ワンピースドレスが包む肢体は、空気の抜けた風船のように縮んでいる。まるで子供が無理矢理大人の服を着たように、ドレスがぶかぶかになっていた。

開いた胸元、はちきれんばかりに膨らんでいた乳脂肪も、触手が絡みつくこともできない元の慎ましさに戻っている。肉付きよく艶かしかつた尻肉や太ももも萎み、甘いミルク臭が漂うような幼さを放つ。

疲労に青ざめた顔。その頬だけが、プニプニと柔らかそうな肉感を唯一残す。その姿はエンジェリックカリンに変身する前、本来の華鈴そのままの姿だった。

「なるほどな……これが貴様の正体か。やれやれ、こんな小娘相手に振り回されていたなど……俺も焼きが回ったものだ」

「うう……はあ……ギスカールウ……」

「ほう、そんな身体でも、まだ睨む力が残っているか。根性だけはいしたものだな」

せめてもの抵抗と必死に睨む華鈴の視線を受け流し、黒衣の巨体は大瓶に歩み寄り、いっぱいに溜まった蜜液を見つめて満足げに頷いた。

「素晴らしい……実に芳しい香りだぞ。見事溜まったものだ」

数日間。延々と垂れ落ち続けた愛液が、決して満ちることはないだろうと思っていた巨大な瓶の淵ぎりぎりまで溜まっている。

顔を近づけたギスカールの吐息で、水面に大きな波紋が生まれる。濃密な雌臭が立ち昇り、上で磔になったままの華鈴の鼻腔にまで届いてきた。

(そ、そんな……に、匂いなんて嗅がないでよお……うう……)

自らが溢れさせたとは信じがたいほどに大量な蜜液。濃密な恥臭を、誰よりも憎い敵に嗅がれてしまっている。その事実が、長い陵辱でぐったりと脱力する華鈴の胸に、耐えがたい恥辱を呼び起こした。

「これなら、もう十分だろう。……さあ、お前達、遠慮なくやるがよい!!」

野太い声が闇に響いた次の瞬間。ドタドタと乱雑な足音を立てて、醜い豚鼻が印象的な巨体——オークの群れが魚腐臭のような体臭を放ちながら姿を現した。

「おお、上手そうな汁だあ!」

「へへっ……こいつを全部飲んでいいんですかい?」

「ああ。好きにやれ。宴会だ!!」

黒衣の高らかな宣言と同時に、オーク達は歓声を上げて大瓶に殺到する。

ジュルルウ……ズズズウ……。

争うよう、たっぷりの華鈴蜜が溜まった瓶にその醜い顔を突っ込んだオーク達は、下品な音を立て、トロリと甘酸っぱいスープを盛大に啜すっていく。

(飲まれてる……あんなに……たくさん……)

長い時をかけて絞り取られた恥液を、魔物達が貪るように啜っている。

まるで自分の淫穴へ無数のオーク達が直接口を付けているような陶醉と屈辱感が、小さくなった胸の奥に黒い疼きを伴って高まる。

(へ、変だよお！ 見てるだけで……嫌なの……)

陰部から溢れた蜜をおぞましい化け物に啜られる。嫌悪感を覚えるべきその光景に、無数の亀頭達が食いつく淫唇がなぜか自然と疼いていく。長時間の加虐で麻痺していた触感が蘇り、腰や尻丘までが快感で粟立ち始めた。

「も、もつと……俺にも寄越せ！」

「へへっ……う、上からまだ垂れてきてるぜえ！」

あつという間に空になってしまった大瓶をひっくり返し、わずかに底に残った汁へ舌を伸ばす者。弱々しく滴るフレッシュ汁を、大口を開けて直接受け止める者。オーク達はその醜い姿に相応しい貪欲さで、魔法少女の精蜜を貪り飲み続けていた。

(飲まれちゃつてる……ボクのHなお汁……全部う……くうう)

これ以上こんな恥辱に耐えられない。目を硬く閉じてその光景から逃れようと試みる。

だが、ジュルジュルと激しく響く吸引音までは消すことができず、耳を激しく撫でるその蜜音が、頭の中を白く染めるような恍惚感を生み出していく。

高まる熱肌に甘露汗が浮かび、少女らしい若草のように爽やかな雌香が立ち昇る。それに誘われたように、絡みつく蛇触手達が、再び活発さを取り戻し始めた。

蜜を絶え間なく流し続ける淫唇。そこにずらりと連なった亀頭の一つが、裂け目の頂点で小さく震えていた女陰茎に吸いついた。

チュウウ……チュウウウウ……

「あぐうっ……うううううっ……ファウツッ！」

まるで牛の乳搾りのように。チュウチュウと音を立ててクリトリスを啜え込む吸引力の凄まじさに、少女の淫口からは堪えようのない蜜が流れ続ける。

ポタポタ……。

「ま、また降ってきてるぞ！」

「すげえ、こんなにたっぷり飲めるなんて、久し振りだぜえっ！」

(ふあう……らあ……んう……だめえ……こ、これ以上、あんな奴らにい……うう、ま、魔力も……魔力も全部なくなっちゃうよお……)

甘い電流が背筋を流れるたびに、限りなく搾りカスに近くなつた身体から、わずかに残つた魔力までもが流れ出していくのをはつきりと感じる。

(流しちゃだめえ……魔力……魔力がなくなつたら……渚ちゃんを助けられなくなっちゃうよお……うう……ああう……)

暗闇の中、数日に及ぶ男根触手達の陵辱にも折れなかつた華鈴の心に、次第に絶望という名の罅ひびが入つていった。

「くくっ……魔力を失つては、さすがにもう大口も叩けぬか……つまらん」

ギスカールは、力なくうな垂れる華鈴の姿を見上げながら、強く指を打ち鳴らした。

その瞬間、宙に浮かんでいた磔の十字架がゆっくりと傾き、そのまま真下に落ち、地面に突き刺さつた。

「はうっ……くう……あっ……」

着地の衝撃で手足の拘束がきつく食い込み、華鈴は苦痛の呻きと共にその目を閉じる。次の瞬間、周囲の空気が一気生臭く、淀んだものに変わった。

(いや……な、何この匂い……は、吐きそうだよお……)

目を開けると、まるで砂糖に群がる蟻のような勢いで、オークの巨体が、華鈴をグルッと取り囲んでいた。

「グヒヒィ……ず、随分縮んじまったなあ。お、面白くねえ」

「そうかあ……グヘッ、お、俺はこれくらいも好きだぜ！」

欲望を隠そうともせずに、オーク達の好色な目が魔法少女の肢体を視姦していく。

まるで目線に指があり、全身を這いずり回っているような陵辱感が、小さな胸を真綿のようにじわじわ締めつける。

(うう……こ、こんな……見られてる……ああっ……)

艶かしい視線の陵辱から逃れようと、必死に身体を小さく縮こまらせようとするが、磔にされてはそれも適わない。

どのオークも下衣を脱ぎ捨てて欲望の怒張を晒している。固めた拳のように膨らんだ先端。割れた先口からは、ドロリと垂れ落ちるカウパー液を溢れさせている。辺りの悪臭は、そこから漂ってくるようだ。

(汚い……やだよ……臭いお汁いっぱい出てるう……くう……)

山頂の雲霞の如く四方八方を取り囲む怒張達。見つめるだけで、その汚液が身体の中に流れ込んでくるような不快感が背筋を走る。

少女の表情が嫌悪で歪む。それがますますオーク達の加虐心をそそのめるのか、水平に近かった怒張の角度が、真っ直ぐ天を指すような角度へと変わっていった。

「おおっ……イ、イイぜえ……そ、その顔だあ……エロいぜえ」

「が、我慢できねえ！」

極太の棍棒のような勃起を突き出すオーク達は、苦しげに悶える華鈴を見つめたまま、自らのモノを激しく抜き始める。

シュッシュッ……。

肉を擦る小さな響きと共に、むわつと臭気の霧が、磔の被虐少女を包み込む。

「あう……うう……いやあ……く、臭い……臭い……！」

小さな鼻も曲がり、意識すら失いそうな悪臭。必死に願っても力が戻ることはなく、ただ現実から逃れるために固く目を閉じるしかできなかった。

（力が……力が欲しい……も、戻ってきて……魔力……魔力さえあればあ……）

闇の数日間、滴る愛蜜と共に失われた魔力を渴望し、心の中で絶叫を上げた瞬間。

「ウオオオオオッ!!」

まるで怒号のようなオーク達の雄叫びと共に、臭気が一気に爆発する。

ドブウウウウウウッ!! ビュルルウウッ!! ビュビュッ!

盛大な射精音と共に、熱い汚汁が闇に飛び交う。

「ひぐう……あっ……ひゃあああっ！」

ビチャビチャビチャ……！

——叩きつけられる熱汁。ぷつくりと柔らかい頬が弛んでしまうほどの激射の勢い。

溶岩のような灼熱と粘液質な感触が、全身をくまなく包み込む。

魔力の守護を失いつつある薄い布地のワンピースドレスは、四方から降り注ぐ白濁の雨によって、一瞬の内にまるで砂糖菓子のような純白に染められた。

ブカブカになった胸元に流れ込む汁が、慎ましい胸の谷間を流れていく。先端で震える朱色のチェリーが、ホワイトチョコレートでコーティングされたように白濁塗れになってしまった。

太ももに残っていた蜜液の流れた跡も、白濁液で塗り潰されてしまう。わずかに震えるだけで、汁塊が揺れながら垂れ落ち、ブーツの中まで臭液漬けになった。

（だ、だめ……くう……な、泣いたりしたら……こ、こいつらを調子に乗らせちゃうから……ぜ、絶対に耐えないと……）

限りなく固体に近いオーク達の汚精液は重く熱く、まるで身体にのしかかれたような圧迫感すら覚える。顔や自慢のツインテールにまで、まるでトリートメントのようになつとりと白液は飛び散っている。

「くくっ……そう気持ち悪がることもあるまい。せっかく魔力を返してやっているのだ」

「うっ……ふえ……え……？」

黒衣の巨体の含み笑いに、華鈴は怪訝そうに呟く。言われてみると、肌にとわりつく粘液の不快感と共に、失われていた力が少し舞い戻ったような燻^{くすぶ}りを感じる。

「言っただろう。快楽と共に放たれる体液は、魔力がもつとも溶け込んでいると。ましてやオーク達は体内に魔力をとどめることができぬ体質。貴様の蜜を飲み干して得た魔力が、そのまま白濁液に溶け出していると言うわけだ」

「そ、そんな!! それじゃ……この中にボクの魔力が……う、嘘っ!?!」

眩暈^{めまい}を引き起こすような事実を聞いた瞬間、今まで嫌悪のみの対象だった白濁液をおろそかにできない気分になった。生臭くドロリとおぞましい白濁。これを浴び続ければ、失った魔力をその分だけ取り戻せるということなのだから。

「くっ、魔力を取り戻したければ……大いに浴び、飲み干すことだな。オーク達の精を」
ギスカールの高笑いと共に、磔にされていた十字架は音もなく消え失せ、魔法少女の白濁塗れの身体は冷たい石の床に投げ出された。

「はぐう……うう……そ、そんな……うそ……」

ようやく長い拘束から解放された華鈴は、硬く固まった手足の感触を確かめるように少しずつ動かしながら、周囲を取り囲むオーク達を見渡す。

その数は軽く十人以上。先ほど盛大に……床にまでべつとりと汚液溜まりができるほどの激しい射精をしたというのに股間の巨棒は揃いも揃って硬く熱くそそり立ち、濃密な臭

気を漂わせていた。

(こ、こんな……こんな汚いものの中に……ボクの魔力が……魔力が……)

まるで糊のようにべっとりとワンピースドレスを包む、ねちゃねちゃとした白濁。これを浴び、飲み続けなければ失った魔力を取り戻せないなど、考えるだけで意識を失ってしまいそうな悪夢だった。

「ゲヘヘ……ど、どうするんだ？」

オーク達はビクビクと邪肉棒を震わせながら、顔面蒼白の魔法少女を見下ろす。

(無理だよ！ こんな汚い汁を飲むなんて……嫌だよお！)

身体と共に闘争心も萎んでしまったように。華鈴は小さな胸の奥で弱音を吐く。

泣き叫び、逃げ出したい衝動が胸に込み上げる。だが、頭の隅にこびりついた、親友の陵辱姿が、その弱気をギリギリのところまで押し止めていた。

(渚ちゃんを助けないと……魔力を取り戻さなきゃ、ギスカールは倒せない！ ……我慢しないと……渚ちゃんもつと辛かったんだから……ボクも、ボクも!!)

数日に及ぶ監禁にも折れなかった正義の心が、少女の恥辱を押し殺す。

「あ、浴びるよ……」

「あゝん？ なんだあ？ 小さな声で聞こえねえなあ？」

「……浴びるよ！ 精液浴びるから……だから、早くボクにかけて!!」

覚悟を決めて叫んだ華鈴は、小さな身体を自らの手でできつく抱き締め、訪れるであろう

熱い白溶岩の雨に耐えるために俯く。

——だが、降り注ぐはずの白濁液は、いつまで経っても放たれることがなかった。

「な、なんで……どうして……」

恐る恐る目を開けてみると、取り囲むオーク達は怒張を震わせたまま、ただニヤニヤと華鈴を見下ろしているだけだった。

「お、俺達は別に、お前にぶっかけてやる義理なんてないからなあ」

「そうだそうだ！ 俺達の汁が欲しいなら、絞り出してみろんだなあ！」

「し、絞り出す……そ、そんな……ああ……」

オーク達を快楽に導く手伝いをする。ミスルの人々を、そして学園のみんなを傷つけた魔物に奉仕するなど、胸が貫かれるような強烈な屈辱だった。

「なんだ、欲しくねえのか……それじゃあしようがないなあ。帰るとするかあ！」

俯き沈黙を守る華鈴の前で、オーク達はわざとらしくざわめきながら背を向け、背後に広がる闇へと歩きだしてしまう。

このまま立ち去られては、もう魔力を取り戻すことはできない。

「ま、待ってっ！ ま……まって……くだ……さい……」

か細く震える声で、華鈴は慌ててオーク達を呼び止めた。

「し、絞り出す……絞り出すから！ ボクに……ボクに……ください……く、ください」

一言呟くたびに胸が張り裂けそうな恥辱が生まれるのを堪えて必死に訴える。

立ち去りかけたオーク達は揃って口元にニヤケ笑いを浮かべ、その股間の巨棒を隠しもせずに再び跪く魔法少女の周りを取り囲んだ。

「さあ、それじゃ早速やってみようか……ゲヘッ！」

「おらっ！ のんびりしてたら時間がなくなっちゃうぜ！」

「ひぐっ……ああ……うう……お、押しつけないでえっ……」

熱気と臭気を放つ怒肉塊が、グイグイと顔に押しつけられる。

太い血管が浮き出て、まるで岩のようにゴツゴツとしたどす黒い塊。その魔根が、つきたての餅のように柔らかな頬を突く。

小さな頬の半分近くを占める男根頭。わずかに柔軟な亀頭が少女特有の優しい弾力を持つ頬肉とぶつかって揺れ、強い密着感を生み出した。

(ひぐっ……臭いの当たってるよお……熱うっ!!)

「おらおら、と、とっとと気持ちよくしてくれねえと、ぶっかけられねえぞ！」

少女の泣きだしそうな表情にも構わず、オーク達は欲望の塊を容赦なく小さな身体に押しつける。

「ちっ、でかいときの方が面白かったぜえ。ここもこんなに小さくなっちゃうよ！」

つまらなそうに罵る一匹のオークが、開いた胸元の中、平らに近くなってしまっている微乳へ怒張を押しつけた。

「ひゃっソッ！ だ、だめ……お、おっばい潰さないでえ……くっ……」

「へへっ、小さいのもそれはそれで面白いじゃねえか……よつと！」

好色な笑みを浮かべたもう一匹のオークが、反対、左の乳房も硬い肉棒で押し潰してしまふ。

平たい膨らみの頂点。豆粒のように小さなニップルが、硬い亀頭でこね回される。柔らかい乳脂肪が消えた分、神経が敏感になっているのだろう。巨乳を触手に弄ばれたときよりも痛烈な刺激が、平らな胸板の灼熱度を高めていった。

「ウへへ……面白いぜえ。俺達の仲間を何人もぶっ殺しやがったお強い魔法少女が、チンポに囲まれて泣きそうになつてるぜ」

「あ、ああ。こうなつちまったら、正義の魔法少女もかたなしだなあ！」

罵りながら小さな胸肉を押し潰す二本の巨根が、容赦なく桃乳首を擦る。鈴口に粒頭が入り込むと、尿道が強く締めつけてきた。そのまま容赦なく左右に引っ張られ、小さな乳首が無理矢理勃起させられていく。

「ひっ……おっぱいいい……ち、千切れちゃうよおっ!!」

根元から切り取られそうな締めつけの苦痛。膨れ上がり感度を増したニップルは、その痛みすらも快感に変え、甘く痺れてしまっていた

「くっ、いいぜえ！ 乳首がチンポに入つて……おおおっ！ 出る、出るぞおっ!!」

ドクウウウウッ！ ビュビュブブウッ！

尿道のニップルが吹き飛ばされそうな激しい振動。大気を震わせる射精音を伴って噴き

出した腐白液が、わずかな胸の膨らみを伝い、お腹の方にまで流れて落ちていった。

(うう……ベトベトで……き、気持ち悪いよお……こ、こんなの……)

眉をひそめて唇を噛み締めながら、華鈴は心の中で悲痛な叫びを上げる。

白濁流の感触が、様々な汚液で濡れたドレスの下を流れていく。強烈な粘度ゆえの、ミズが這いずるような遅さ。身体が凍りつきそうな悪寒と同時に、肌に染み込む確かな魔力が熱い活力を呼び起こしてくれた。

(魔力が本当に戻ってる……も、もつと……もつと魔力を取り返さないと)

身体の芯を焦がす魔力だけを支えに、汚液塗れの魔法少女は必死に恥辱と屈辱の悲鳴を咽喉の奥に飲み込む。

「おつと、イケねえ。奉仕させるつもりが、早々とぶちまけちまったぜ！」

「情けねえなあ！ おい、替われ！」

射精を終えた男根を、肩で力なく揺れる薄汚れたケープで拭っていたオーク達が退く。ひと息つく間もなく、次の勃起がきつく閉じられた小さな唇に押し当てられた。

「うぐつ……ンッ……な、何……」

「ほれ、しゃぶって気持ちよくしてくれえ！ 身体にぶっかけられるより、口で飲んだ方が魔力もしっかり吸収できるぜえ！」

「くっ、口で！ そんなこと……」

「やらねえなら、こ、このままお前の魔力をキンタマに詰め込んだまま帰っちゃまうぜ!」

「あくっ……うう……それは……」

とにかく魔力を取り戻すことを最優先に考えなければいけない。自分の屈辱や恥辱など、今も囚われている渚が受けたものに比べれば、たいしたことはない。

(な、渚ちゃんを助けないと……魔力……魔力さえ戻ればこんな奴ら……！)

大切な親友の笑顔を思い浮かべて勇気を振り絞り、少女はまるでサクランボのように小さくて赤い唇を開き、目の前の肉棒の先端に近づけていく。

チュウ……チュウ……チュウ……チュウ……

自分の腕よりも太い男根を、啜えられるわけもない。赤黒い表面だけがわずかにプヨプヨとしている亀頭。そこにキスを落とすようにそっと吸いつくのが精いっぱいだった。

(く……臭いよお……こ、こんな……こんな汁を飲まないといけないなんて……)

亀頭の先、割れた部分に吸いつき、小さく舌を動かしてみると、その部分に溢れ出していた透明に近い白濁汁の雄臭が、口いっぱいに広がった。

まるで海水のようにしょっぱく、冷えて固まった脂のようなねっとりとした食感。

それは、今まで口にしてきたどんなものよりも不味く、吐き気を感じずにはいられないおぞましい味わいだった。

「えろ……ちゅうぷう……んんん……んああああむう」

「ケケッ、ど、どうだあ？ 自分の魔力入りのチンポ汁の味はあ？ う、うめえか？」

「おら、待ってるのは一本じゃねえぞ！ こっちも手で扱え！」

「お、俺も！ 俺もだあつ！」

口に広がる汚汁の味に、目にうつすら輝くものさえ浮かべて耐え続ける華鈴の頬に、新たに二本の男根が押し当てられた。

「むちゅあ……こ、こんなにいっぱい……ふむうああ……じゆるるう！ ぷはあつ」

ぷっくりと柔らかい頬を押し潰す勢いで押し当てられる太い怒張。口の奉仕を続けながら、両手に一本ずつそれを掴んで上下に抜き始める。

（な、なんて大きくて熱い……うう……お、お父さんのと大違いだよお……）

幼い頃、一緒にお風呂に入っていた頃に見た父のものとは比べながら、手の中で熱く震える肉棒を抜く。それだけでは満足させられないだろうと、涎のように透明な粘液を滴らせる亀頭に自ら吸いついた。

再び口の中に広がる雄の腐臭。だが、同時にほんのわずかずつではあるが、魔力が身体の芯、丁度子宮の辺りに戻ってきているような熱感、そして甘い疼きが生まれていた。

（も、戻ってる……んう……こ、このまま……オーク達のお汁を浴びれば……きつと、きつとすぐに元の力を取り戻せる……んう……あふあつ……）

この陵辱感も、逆転の勝利への一步。そう思うと、身体中にまとわりつく汚液の不快感も、口に広がる腐臭にも耐えられそうな気がした。

快楽に流されず、このまま魔力を取り返す。その一心で懸命な口奉仕を続ける。

（早く……早く魔力を返してよお……うう……）



拳ほどもある亀頭にしゃぶりつきながら、手も小刻みに動かし続ける。

絹のようにきめ細やかな感触の手袋が、無骨なデコボコ竿を摩る。薄い布一枚越しに感じる肉竿の硬度と熱感。ひと擦りするたびに、快感を表すように亀頭が膨らみ、その先から滲み出るカウパー液が染み込んできた。

ぐちゅう……ちや……ねちや……ぬちやあつ。

しばらくそうしていると、手袋の中全体が汁塗れになってしまふ。動かすたびに、粘着感と籠るような熱臭気が手の平全体を包み込んだ。

「おおっ……た、たまらねえっ！ 手袋スベスベで……いいぜえ!!」

(こ、怖い……ど、どんどん大きくなって……か、硬いよお……うう……)

強く握る手の平を押し返すように、男根は手の動きに合わせてムクムクと風船のように膨らみを増していた。

鈴口の割れ目から溢れ出す白濁は、とうとう二の腕までを熱く濡らしてしまった。まるで蒸しタオルで包み込まれたような熱感を生み出す。

「んあああつ……ぶちゅうう……じゅぼ、じゅぼお——れろお……はむあんぐぐう！」

両手の膨らみが、無意識の内に唇の動きも活発にしていく。

小さな口を限界まで広げて鈴口に吸いつき、まるで蜜を吸う蝶のような熱心さで、溢れる透明汁を啜り飲んでいく。

「おら……し、舌も使つて……ペロペロしてみるんだ！」

「んぐう……あむ……は、はい……うう……」

（こんな魔物に命令されて……が、我慢だよ、我慢しないと……こ、これもすべて魔力を取り戻すためなんだから……ね）

熱く塩っぱくする雄汁を啜りながら、華鈴は必死に自分に言い聞かせて奉仕を続ける。

恐々と小さな苺舌を伸ばし、そっと亀頭の先を舐め上げる。グロテスクに割れる亀頭の先を舌で舐め転がし、更に奥の尿道を突き舐める。

舌先に染み込む塩っぱい味。それと共に子宮で高まる灼熱美感。無意識の内に舌の動きは活発になり、まるで子猫がミルクを舐める熱心な奉仕へとなっていく。

動きに合わせて、ドクドクと震える灼熱棒の奥から溢れる汁は、次第に白濁に近い粘度を持ち始めていた。

「くう……ゲへへ、ま、魔法少女のフェラチオは……さ、最高だぜえ！」

「夢中でしゃぶりついてやがる……ケケッ、す、好きものだなあ」

（そ、そんなことないもんっ！ くう……が、我慢だよ……今は、早く魔力を……）
「んっ……は、早く……早く出して……ンチュウ！ れろれろお——ふはあっ！」

浴びせかけられる嘲笑を必死に堪えながら、華鈴は手と口を動かして、腐臭の白濁に溶け込んだ自らの魔力を求め続ける。

「そ、そんなに欲しいのかあ……おおっ、も、もうすぐだあっ！」

「ぶ、ぶっかけてやるぜえ！ おら、し、しっっかり扱けえ!!」

少女の切実な求めに応えるように、極太竿達が根元から痙攣し、膨れ上がる。
ドブドブドブドブウッ！ ビュルルルッ！

「ひゃふっ！ あちゆうっ……あああつ！ んぐんぐう……ずじゆるるるう」

まず、両手に握った熱望が弾け、放水車のような勢いの白濁流を放つ。

鯁えた匂いを伴って降り注ぐ白濁。自慢のツインテールは汚液に塗り潰されて力なく垂れ下がり、白濁液はそのまま肩のケーブや首筋のチョーカーへ滴り流れた。

べつとりとした感触が熱肌の疼きを高まらせ、全身が恍惚感に包まれていく。

「あむう……はああ。凄い、こんなにたくさん——んぐうう……むはあつ」

うっとりとして背筋を震わせる華鈴の頭を、正面のオークの巨大な手が掴む。

「おら、休むな！ お、俺も早くイカせろっ！」

「あぐう……ンンンングッ！ あ……チュウ……ンンンッ！」

休む間も与えられず、小さな口いっぱい、無理矢理巨根の先が突き立てられる。

表面だけがプニッと柔らかい亀頭に口も鼻も押しつけられ、悪臭で窒息してしまいそんな苦しさを味わいながらも、魔法少女は律儀に舌を動かし続けた。

（ま、魔力う……も、戻ってる……戻ってきてるからあつ……も、もう少しっ！）

子宮の中で大きくなる魔力と快感。このままの調子で白濁を浴び続ければ、失った力を必ず取り戻せるはず。その確信が、魔法少女の奉仕を後押ししていく。

「じゆるるるうっ！ んぐんぐう——じゅぼぼぼ……じゅぼおっ！ はむああつ！」

放たれた白濁が泥のようにこびりついた両手で竿を扱き、大きな鈴口を必死に唇で啜え込み、その雄臭い尿道を舌先で刺激する。

(染み出てる……臭いお汁たくさん……出るの？ もうすぐ出るの?)

プヨプヨとした亀頭が硬さを増して痙攣し、進りの近づきを知らせた直後。

「ウオオオッ！ で、出るぞおっ！ 全部……全部飲めえっ！」

ビュルルルルルウッ！ ドブウウウウッ！

「オゲウッ！ ああっ……うっ……ンンッ!!」

灼熱弾が唇を押し分け、咽喉頭を退けて食道に流れ込む。

食感はそのまま飲むゼリー。菌に粘膜にぶつかり、はつきりとした存在感でこびりつく硬さ。舌の上に垂れ落ちてくると、強い塩味と雄腐臭が広がっていく。

「ごきゅごきゅ……おええ……ごくく……んびゅうあ！ 臭い……臭い精子たくさん……あうう！」

呼吸をする間もないくらいに溢れ返る白濁が、飲みきれずに唇の端からこぼれ出る。

「おら、せっかくの汁が溢れてるぞ？ いいのかあ、魔力が無駄になっちゃうぜえ？」

(ま、魔力……だめ……の、飲まないとお……か、勝てない……ギスカルに勝てない)

胃と食道が受け入れるのを拒み痙攣している汚液を、必死になって吸い込む。

支えるのは、宝具に選ばれた魔法少女の使命、そして親友への思い。

「おごう……んぐぬぐう。ぐびっ、ごくごくく……あはう!!」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>